春燈

宮尾登美子

春燈

宮尾登美子

新潮社

春燈（しゅんとう）　定価一九〇〇円

発行　昭和六十三年一月二十日
二刷　昭和六十三年二月二十五日
著者　宮尾登美子（みやおとみこ）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一番地
電話　業務部(03)二六六一五一一一
編集部(03)二六六一五四二一
郵便番号一六二／振替　東京四一八〇八
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社

© Tomiko Miyao, 1988, Printed in Japan
ISBN4-10-368501-8 C0093

春

燈

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章

緑町を上へ上ると新道の三条通りに交わり、三条通りを北へ進むと辺りに家は疎らになって、その道は電車道を跨いでのち、やがて弥右衛門ヶ淵の土手に突き当る。

その日は雨が降っていて、土佐独特の水桶の底が抜けたような有様ではなくともかなりな降りであることは、傘に当る雨音だけでなく、道の両側の湿田に絶え間なく描いている水の輪を見てさえ判る。足先を濡らす雨の冷たさ、傘を叩く雨の重さ、泥濘のなかを歩いても歩いても土手の竹藪は見えて来ず、小さな綾子はもう嫌や、早う家へ帰りたい、と心のうちでひそかに思った。

日頃から、この子の辛抱の棒は針ほどもありはせぬといわれている綾子だけれど、いま、「もう嫌や」をじっと我慢しているのには理由があって、それはかたわらを歩いているひとがいつもの喜和でなく、父の岩伍だからであった。

これが喜和なら、先廻りしてすぐ綾子の顔いろを読み、

「疲れたかね。ほんなら今日はもう止めにしょ」

か、或はそれを見越して最初から男衆の一人を連れて来て、すぐおぶわせるかのどちらかで、そ

れがよく判っている綾子には、家を出るときから今日は何やら大事な日であることの心積りだけはあった。
店の土間に赤いゴムの先皮のある雨木履と子供傘が揃えられ、それを履こうとした綾子のなりを見て岩伍が、
「この雨に裾の長いは歩き難い。誰ぞ縫上げをしてやれ。ついでに袂も」
と奥へ声をかけ、綾子は一旦着た銘仙の単衣をもう一度脱いで、近寄って来た菊にそれを手渡した。
ふだんでも袖を長くするために一反全部を使い、本裁ちの着物を着せられている綾子の着物にはたっぷりと上げがあるが、いま菊はその上げの内側にもうひとつ二重の上げをするため、縫糸を頭で研いで大針で飛ばし、そして袖をも外側からつまみ上げ、それをまた綾子に着せてモスリンの兵児帯を締めた。
脛から下の出た綾子の姿を確かめてのち、岩伍は、
「今日は道が湿いきに、着物にはねが上らんよう精出して足をあげて歩く」
といい聞かせ、続いてパチンと音を立てて開いた小さな唐傘を握ってみせて、
「傘は肩へかけてはいかん。こうやって体の前へ立ててさしてゆく」
と綾子に渡し、
「判ったか？」
と念を押した。
そのとき綾子ははい、とうなずき、いわれた通り雨木履を一足一足高く上げ、片手でまっすぐに傘を支えて歩き出したが、そのあまりのしんどさに三条通りの角に出るか出ないかで早くも岩伍の

言葉に不審を持った。この傘はつい先頃、上町の傘屋へ喜和とともに買いにゆき、庭に干してあるさまざまの子供傘のなかから萩の花を描いた一本を選んだもので、そのとき傘屋の主人が、

「嬢さんはもう字が読めますろう。名を書いちょきましょう」

と畳んだ傘の上部に赤いエナメルで、とみたあやこ、と大きく書いてくれた。

その帰り、お天気なのに綾子は嬉しくて傘を上まで開き、日傘のように肩にかけてくるくる廻しながらお稲荷さんの坂をスキップで下りて行ったが、喜和はその折何もいわず、いつものように綾子のはしゃぐさまに目を細めているだけであった。傘の柄を肩にもたせかけることを、何故お父さんはいかんというのかしらん、それに足を上げて歩いたらよけい泥をはね上げるのに、と考えながらも綾子はそれを岩伍にはいえずにいる。

常日頃から家中でいちばん偉い父親はただおそろしく、その命令たるやまるで雷鳴のように轟き渡る感じを綾子は抱いているのであった。喜和以下、岩伍の言葉には全員ひれ伏し、逆らうなど誰も思いもよらないし、だからこそ昨日夕飯どきに岩伍から、

「綾、明日はお前の六つの六月六日じゃ。女子が糸道を明けるという日じゃきに、お父さんと一緒に筑前琵琶の平池先生の家へ弟子入りさせてもらいに行く。ええか、よう身を入れて習わんといかん」

といわれたときも、琵琶など見たこともないままうなずいた。

富田はまことに人の出入りの多い家で、それは家業の芸妓娼妓紹介業に関わるひとの他、生れも育ちも判らぬ者まで流れついて来て、ずい分と長逗留することがある。そのあいだ、この家の走り使いや下働きなどして自ら寄食のいいわけにするのが大半だけれど、なかには器用なひともいて一芸持っている例もあり、こういうひとはお礼心のつもりか、家の者にそれを伝授してゆくこともあ

った。
中庭を隔てた離室でもう六年越し結核で病臥している長男の龍太郎に、「首振り三年」の尺八をわずか一ヵ月で教えた権八さんもそうだったし、この家の養女となっている菊にマンドリンの手ほどきをして去った一平さんも、そして同じ養女の絹に、簪などのつまみ細工の簡単なものを指南していった善さんもその一人に数えられる。
芸は荷物にならぬというが、こういうひとたちから習ったものをその後身につけるかどうかは本人次第であって、げんに菊も絹も師匠の姿が消えるや否やきれいさっぱりと忘れ、わずかに龍太郎のみが菊を経てマンドリンのいろはくらいは弾けるようになっている。それというのも、尺八は息を使う故に病気にさわると医師に止められ、仕方なし大正琴で慰めていたものが少し進んでマンドリンに移ったというところだったろうか。
綾子がもの心ついた頃、みんなが谷さんと呼ぶロイド眼鏡の青年がこれもしばらく滞在していたことがあった。谷さんは他の居候のように下働きの用はせず、岩伍に呼ばれてときどき新聞などの難解な言葉の解説をしたり、また男衆たちの手紙の代筆などの役も受持っていて、綾子も読み書きを習ったのはこのひとからであった。綾子の記憶には、白絣を着て机の上にフケを落していた谷さんと、金文字の部厚い背表紙の本を小脇に抱え、さっそうと吊鐘マントをひるがえしながら外から帰って来た谷さんの夏冬の姿があるから、富田には一年以上の逗留ではなかったろうか。
綾子はまず家中のひとの名前を書くことから教わり、谷さんの本のなかから仮名だけを拾い読みすることができるようになって、そして次には、
「よし、綾ちゃんには僕が詩を作ることを教えよう」
という段取りになったらしい。

家中に詩の教科書になるようなものは何もなく、谷さんは口移しで七五調の白秋の作品などを教え、そのうちとうてい詩とも呼べぬ短いものを綾子が作るようになって大満悦のていであった。これが綾子の確か四歳の頃で、そのあとハイカラなダンス教師がやって来たときには、夜更けて家中のものが物干台に上り、揃ってチャールストンを習うのについて綾子も踊ったり、また三日に一度現われるクリーニング屋が墨絵の動物を描くのをのぞくのが面白くなって、手を取って教えてもらったことなどもある。

富田の家を通りすぎてゆくこれらのひとは、ときに十人近くにもなる使用人たちのけだるい午後の時間や、夜更けての所在ないひととき、恰好のなぐさみを提供してくれる有難い恵みであって、そこに七めんどうな子弟の礼など全く要らないのがいっそ便利であった。

「小父さん、うちも描きたい」

といえば、金縁眼鏡のクリーニング屋は往来の自転車を軒の下へ入れてきてから、

「硯、持て来や」

といい、

「そこへ坐りや」

と綾子を膝の前に呼んでから、たっぷりと墨を含ませた大筆を綾子に持たせ、それに我が手を添えながら一気に鶏などの曲線を描いてゆく。緩急の筆使いや、ときに硯の丘で筆の裏表をならしたり、筆先を水にくぐらせて薄めたりとまことに手練れの業で、綾子がうっとりと手を任せているうちにたちまち白紙の上には闘志露わな軍鶏（しゃも）の姿が生れてくる。

そしてそのあとは、

「さあさあ見てやって。五つの子供が勢いのええ鶏を描いたよ」

と家中に披露してくれ、綾子はあちこちからの讃辞を浴びながらすっかりいい気分になるのがお定まりであった。

詩にしてもそうで、綾子が指を折って字数を数え、誰かに聞いたような言葉を並べて雀の歌などを作ると、谷さんはそれに手を加えて新聞社に持込み、煽り立てて掲載してもらえばまるで天下を取ったような勢いで、綾子のみならず谷さんも大いに面目を施すという按配になる。何しろ家の中には大人ばかり、子供といえば綾子ひとりしかおらず、その綾子も岩伍四十五、喜和三十五のときの遅子とあれば主夫婦の気受けをよくするためには子を持ち上げるに如かず、とはこの家に流れついて来たひとたちがおのずから体得している世智というものであるらしかった。

雨のなかの難渋の道も辛抱すれば少しずつ捗り、やがて弥右衛門ヶ淵の藪の手前を西に折れるとここはいちめんの出水で、岩伍は綾子を振返り、

「水の上に出ておる青い草の上を踏んで歩く。転んだら溝のなかじゃきに気をつけて」

とだけで手も引いてくれず、自分が先に立って突当りの黒塀の家をおとなった。

玄関で差出された雑巾を受取り、脛から着物の裾まで無数に跳ね上った泥の斑点を、自分の手で拭うのも綾子には初めてのことで、やがて通された表座敷はひどく暗かった。辺りはしんと静かで、座敷を見廻すと、床の間に立てかけてある二面の楽器がまず目に入り、綾子は、あ、うちの龍たんのマンドリンの大きいのや、と思った。

お父さん、あれが琵琶？　とたずねようとしても、父は端坐して口もひらかず、綾子もあわてて居ずまいを正して無言で待つうち、襖をひらいて現われたひとを見て綾子はびっくりした。頭はひっつめ髪で白粉っ気はなく、喜和よりはずい分若いと思われるのに眼光炯々としておそろしく、それに普段着の木綿縞の上に白い水干を羽織っている。白い水干は、毎年春の稚児行列に出るため綾

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

子も紫の房をつけたものを一枚持っているが、こんなふうに家のなかで気軽く着るものではないと思っていただけに、最初から気を呑まれるに十分であった。

が、座蒲団から下りて岩伍ともども挨拶が済んだあと、平池先生はぐっと砕けて、

「まあまあ座敷の暗いこと。待ちよって頂戴。いま雨戸を開けますきに」

と気さくに立ち、がらがらと縁側の戸を繰った。

その後姿に再び綾子は驚き、あらまあ、袴も穿かんと上だけ着ておいでる、と水干の裾をひらひらさせているのを見て思った。稚児行列の日は、朝暗いうちから風呂に入り、喜和に連れられて上町の石水美粧院へ行ってまず顔と首に真っ白な固煉の白粉を塗ってもらい、額にふたつ、ぼうぼう眉を描いてのち頭にかもじを足して稚児輪に結ってもらう。固いびんつけをつけて髪を梳き上げられると眉も目も吊り上るほどの痛さだが、稚児に選ばれるのには少々の我慢は当り前のこと、と綾子は自分で了簡しているところがあった。顔と頭が出来ると縮緬の振袖の上に水干を着、それを押えつけるようにして最後に上から緋の袴を着ける。仕上りは頭に花飾りのついた金の烏帽子を頂き、手に蓮の造花を持つことで、こうすれば子供ながらに気持もしゃんとし、お釈迦さまを乗せた作りものの象を、紅白の手綱で引くことができるのであった。

上の水干だけを放して着るなど思いもよらず、呆気に取られている綾子に平池先生は白い歯をみせて話しかけ、

「琵琶を聞いたことがあるかね？」

「何ぞ他に楽器をつついたことは？」

「上手になったら人前でやらしてあげるきにね」

と、その鋭い目の光に似合わず、言葉は親しげであった。

琵琶は綾子の膝に余り、三角の撥も握るのがやっとの大きさだったが、ただよいことには両方ともひどく軽かった。それに、龍太郎が弾くマンドリンの絃八本は鋼でできており、押えると子供の指では痛くさえあるのだけれど、琵琶は絹糸を張ってあるためか、触れると金属よりははるかにあたたかなものが伝わってくる。

平池先生は綾子に琵琶を持たせ、その前に跼むようにしながら、

「嬢さんは月火水木金土、を知っちょるねえ。左の指で押えるところにはこの名がついちょる。トン、というのは指を全部離して弾く、レは撥で糸をひっかける」

と説明し、見台の上に「赤垣源蔵徳利の別れ」と書いた譜本をひろげ、

「ええかね。水トン、金土レトン、火土土レトン」

はい、やってごらん、と手を添えていく度でも稽古をつける。

歌のほうは平池先生が弾き語りで「たそがれ告げる鐘の音も、凍りがちなる寒風に、つれて降りくる白雪の、」と手本を示したあと、これも短く区切って綾子に教えてゆくのであった。

最初の稽古はおよそ一時間ほどだったろうか。終ると手を叩いて、はじめ玄関へ応対に出たばあやを呼び、カルケットと番茶を持ってこさせたあと、

「作一はもう起きたろう。連れてきて頂戴。乳呑ますきに」

と命じ、ばあやから受取った赤ん坊を抱くと、臆するふうもなくいきなり水干の前をはだけて乳をふくませた。

そのときの綾子の驚愕は、眼光炯々、水干の裾のひらひらにも増して胸が高鳴り、思わずうなだれたまま、顔が上げられなかった。

岩伍はと見ると、この頃授乳は人前でも平気で行なう習慣のせいか気にするふうもなく、

「気ずいな子ですきに、きつうに稽古をつけてやって下さい」
などといい、先生もまた、赤ん坊を右左抱き替えながら、
「なかなか筋がよございます。すんぐに上手になりますろう」
と応じているのに、綾子は一つつまんだカルケットを口に入れることもできず、じっと俯いたままでいる。
この体が震えるほどの驚愕と嫌悪は言葉にはできないけれど、青い静脈が網の目のように浮いた、浅黒い肌の大きな乳房を人前で露わにする光景は初めてだっただけに、それをまたとなく見苦しいものと受取った綾子の衝撃は容易に去らなかった。喜和は、どこの町風呂に行っても誰も叶うものはないといわれるほど肌の白いひとで、綾子はいまでも、喜和の手枕で毎夜、添寝してもらう習慣になっている。母の胸に手をさし入れ、うす桃いろのやわらかなその乳首に触れていると、揺るぎない確かな安堵があり、その安堵のなかに身をゆだねていればいつのまにやら眠りのなかに入ってゆけるのであった。
家のうちは、女の体のことをすぐ口にして冷やかす男たちが始終出入りしているだけに、喜和も菊も絹も、仮りにも人前で肌を露わにするのは固く慎んでいて、盛夏でもアッパッパさえ着たことはない。風呂に入るにも、男たちが皆終ってからのちの話で、外が明るいうちに女が帯紐解いて湯殿に入るなど、この家ではありようもないのであった。
それだけに夜、豆電球だけの乏しい灯りのもとで、母の白い胸に触ることは喜和と綾子のみが持ち合う密事であって、これだけは誰も侵すことのできない母子の絆であるように綾子は胸に刻みつけていたらしい。ずっとのちに、兄嫁の小夜子が洗濯などに一息ついたあと、縁側で胸をくつろげ、幼い甥や姪に乳を含ませている様子を見て、あ、姉さん一休みしよるところやな、赤ちゃんもお乳

もらって喜びよるのやな、と感じ、ひどく寛大な気持になれたが、平池先生の場合は最初だったせいか、そんなふうに軽く見ることはできなかった。

醜いものが極端に嫌いな綾子は、幼い頃から顔に病痕のある物乞いや、容貌魁偉の男など見るとすぐふるえて泣き出す癖があり、平池先生の場合も、女には珍しい大きな鋭い目付きと、袴を略した水干の姿の上に人前での授乳が重なり、危うく泣き出すところだったのを辛くもとどまったのは、これも父親への手前であったろう。手に持ったカルケット一枚は口に入れる余裕もなく持帰ったが、てのひらの中で湿ってぼろぼろになったそれを、戻るなり綾子は猫のミイを呼んで与えた。化猫といわれるほど肥ったミイは顔を振ってカルケットを食べたあと、余勢を駆って綾子の手の甲を嘗め、綾子はそのざらざらした舌の気味悪さを感じたとたん、とうとう弾けるように大声を挙げて泣き出してしまった。

ほんとうは、琵琶なんて習いとうない、平池先生大嫌い、と喚きたいのをこらえにこらえて戻って来ただけに、猫に手を嘗められただけのことで、口惜し涙が一時に大爆発したところらしかった。その夜、綾子はまた熱を出し、菊がごぼごぼと音をたてながら水だけをゴム枕に入れ、それを当てがってくれたが、目の前には赤線を入れた赤垣源蔵の譜本がずっと浮遊し、熱にうなされて水トン、金土レトン、とまるで禁厭を唱えるように呟き続けていたらしかった。

岩伍の前では歯をくいしばってでも弱音は吐かない、と子供ごころに覚悟の臍を固めていても、張りつめた気がゆるむと頭痛発熱といういつもの症状が起きてくる。それでも止めたい、と明らさまに口に出さなかったのは、子供にかまけるのを男の第一の恥としている岩伍が、珍しく身を乗り出して熱を入れるさまにやはり恐れをなしたということもあったろうか。ただ岩伍には忙しい家業というものがあって、毎度必ず子供の稽古事について通う暇があるとはいえず、時折は亀になった

り米になったりしたが、綾子は、付添いが父と男衆とではこうも自分の気持が違うものかといつも思った。

岩伍のときは終始無言で監視の目を光らせているような感じがあり、よく覚えなければ、と力み返るのに、亀や米の益もない饒舌を聞きながら歩いてゆけば、平池家の門前あたりでもう気分もだれてしまう。先生の教えを、一言たりとも聞き洩らさじと張り詰めている岩伍の場合に較べ、男衆の前では少々よそ見をしても決して叱られはしないとたかをくくっているところがあった。

琵琶なんて嫌いや、と思いつつも綾子が通ったのはその年の夏の終り頃までではなかったろうか。稽古日のたびに綾子が気の進まぬふうを見せるのが止める第一の理由だったかも知れないが、それより他、富田の家では秋十一月には長男龍太郎の死と、次男健太郎の婚礼とをほとんど同時に迎えなければならなくなり、夏うちから家中の誰もが目を血走らせ、子供の稽古事どころではなくなっていたということもある。

綾子は大して上達もせず、赤垣源蔵を全部終えないうちに嫌いな琵琶と縁が切れることとなった。家に琵琶はなく、平池先生に稽古用を、と頼んであったのがまだ届かぬうちだったので忘れるのも早く、龍太郎の死以後、家のなかにはあらゆる音曲を絶やしていたこともあって、水トン金土レトンの呪咀は綾子の頭からは遠ざかってしまった。

稽古事というのは、こののちもあらゆる場合綾子にはうまく運んだ試しはないが、最初の経験のこの琵琶を思い出すたび、綾子には何故か不思議でならぬことがひとつだけある。

それは、琵琶の稽古に絡まる一連の情景のなかに喜和がただ一度も現われてはこぬことで、こういうことは綾子がものを憶えはじめてこの方、あり得ぬものであった。綾子はまことに病弱で、赤ん坊の頃から帯屋町の竹内病院へ入退院を繰返し、訪れるひとも家うちに綾子の姿が見えないと、

「嬢さんはまた、帯屋町の別荘ですか」

というくらいだったが、病院生活のどの部分を思い出しても必ずかたわらに喜和の姿があった。

吸入器や灌腸器を片手に提げている喜和、氷嚢へ入れるための氷を桶のなかで砕いている喜和、看護婦から赤と青の鉛筆で記される脈搏と熱の表の説明を受けている喜和、そして夜なか、ふっと目を明けたとき、いつでも自分の顔をじっとのぞき込んでいる喜和の顔を間近に見ることができた。高熱を出して天井がぐるぐる廻るときでも、喜和がいつも自分のそばにいて守ってくれると思うだけで苦しさも薄らぎ、寝心地のよい蒲団にすっぽりと包まれているような母の深い慈愛を感じるのであった。

病気のときに限らず、家の日常でも、片時たりとも喜和と離れていることはなく、あるとすれば朝、大家内の食事の用意と、神棚への供え物で家中まるで戦争のようになる時間だけで、このときばかりは綾子は所在なく着物の脇に両手を入れ、喜和の仕事の終るのを待つばかりとなる。

家の中に人手は十分過ぎるほどあっても、綾子が甘えられるのは喜和ただひとりなのに、何故か琵琶の稽古にだけは喜和は関わってはおらず、このことはずっと綾子の頭の隅に解き難い謎として残った。年月経って綾子が成長して結婚し、子供も養ってのちのこと、自分なりに憶測してみたとき、琵琶の一件は綾子の生みの母を抜きにしては考えられないのではないかという推測ができたのであった。

綾子の実の母は、義太夫語りの芸名巴吉太夫で、このことを綾子がはっきりと知るのは小学校六年の秋になるが、ではそれまで、喜和を血の繋がった母親と思い込んでいたかといえば、これには微妙な感覚がある。

例えば、何かの拍子にふと一瞬、綾子がひとりでいるとき、米がつかつかとやって来て長火鉢の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.